



弁護士は小説家に向いているか

会員 越智 敏裕 (48期)

—— 弁護士経験は、歴史小説の執筆に役立っていますか？

最近、よく訊ねられる質問の1つです。

小説は人間を描くものですから、私のささやかな弁護士経験で遭遇した人間模様はもちろん役立っていますが、直接的ではないので、やや返答に窮していましたが、10月刊行の最新作『計策師』（朝日新聞出版社）は、答えの一つになるでしょうか。

甲斐の武田信玄、駿河の今川義元、相模の北条氏康が覇を競っていた戦国時代。

本作では「平和を創る」をテーマに、「甲駿相三国同盟」締結の水面下の外交交渉をモチーフとし、「戦国の竜馬」とも言うべき無名の人物を描きました。

冒頭で主人公は身に寸鉄も帯びず、落城必至の敵城へ降伏勧告に向向くのですが、大失敗します。無力に絶望しながらも彼は、同盟の実現によって大きな平和を勝ち取ろうと、三国を駆け巡ります。人は金に性に名譽に弱い、利では微動だにしない人間もいる。足を引っ張る味方もいる。無理難題をこなし、数々の障害を乗り越え、最後には劇的な同盟締結に漕ぎつける。戦ではなく、手に汗握る説得と交渉の場を描きました。

乱世ですので、彼は身を守るために刀を用いますが、武器はあくまで頭脳と舌。その意味で現代の弁護士に近い。弁護士経験があったからこそ納得のいく作品に仕上がったと自画自賛しています。

7年余りの間に数十回落選して、2017年末に日経小説大賞を受賞しました。

デビュー作「大友二階崩れ」では、義に殉じようとする兄と愛に生きる弟の相克を、「大友の聖将」では、極悪人が信仰を通じて聖者へと変わってゆく奇跡を、「大友落月記」では、心ならずも敵味方に分かれ死闘を尽くす親友同士の友情を、「酔象の流儀 朝倉盛衰記」では、不本意な人生を前だけ向いて歩もうとする武将の無私を、「戦神」では戦国の世に咲く究極の夫婦愛を、「妙麟」では初の女性主人公による戦国の悲恋を、それぞれ描きました。



現在12の出版社から数年先まで執筆のご依頼を頂戴しておりますが、弁護士が主人公の現代物も含めて、書きたいテーマやモチーフは優に100以上あり、一度の人生では書ききれないでしょう。

周りには、何をバカなことやっているんだと冷やかな目で黙殺する人もいる一方、徹底的に応援してくださる方もいて、恐縮しつつ感謝いたしております。

タイトルの問題提起はYESだと考えています。

法律も文学も人を対象とする。何かのテーマを、言葉で伝えて人を動かす、文章とその構成に頭を捻るという点で、法律実務と小説執筆は共通しています。現実世界には偶然や奇矯な行為が無数にありますが、小説では原則としてすべて必然にする必要があるので、登場人物の行動や事象に、論理性、合理性、一貫性を持たせませんが、弁護士にはお手の物でしょう。実に様々な人や事件と出会える弁護士は、題材にも事欠きません。

ただし、弁護士は「換言すれば」「要するに」などと、手を替え品を替え、同じテーマを繰り返し説明しますが、小説で説明はNGなので、この癖を直す必要はありますが。

激務の後、しみりと別世界に浸り、人生も捨てたもんじゃないなと思って頂ける小説をご用意しております。お気が向かれたら、どうぞ手に取ってみてください。